れた真実
ダム」の謎

国や自治体の考えていることはよくわからない——。住民の強い反対を押し切って進めた八ツ場ダム。国の「建設中止」表明にすぐさま、埼玉、東京、千葉などの知事たちはこぞって反対した。ところが、6年前には同じ知事たちが八ツ場ダムと同じ群馬県内のあるダムから「謎の撤退」をしていた。そのダムは八ツ場ダムよりはるかに安く、住民の反対もなかったのだが——。

紅葉がまぶしく萌える山あいを流れる片品川の流れは、八ツ場ダムがつくられている吾妻川と群馬県沼田市で合流して、利根川へと注いでいく。

この片品川を上流へとたどると、群馬県の北東部・尾瀬の麓にあり、スキー場や温泉地で観光客がにぎわう、片品村役場が見えてくる。

村役場の隣地にある公園には、湧水が流れ出ていて、口に含んでみると「清流のふるさと」らしくさわやかな味が広がる。片品村の水道は豊富な湧水群を水源としていて、「平成の名水百選」（環境省）にも選ばれている。

八ツ場ダムは計画当初から激しい反対運動が繰り広げられた。その57年にわたる歴史の中で、同じ利根川水系にあって同時期に計画が進行していた大規模ダムがあった。

このダムは、独立行政法人「水資源機構」が片品村に建設を進めていた「戸倉ダム」。だがなぜか、この戸倉ダムは建設中止が決められていた。

私に読者から手紙が届いたのは、10月初旬だった。

「今は語る人がいなくなりましたが、地元の政治家や国交省の官僚が大きな過ちをおかした戸倉ダムの経過を知る側から見ると、埼玉県や東京都知事らの発言は、理解出来ません」

戸倉ダムの予備調査の着手は、八ツ場ダム反対運動が激しかった1972年にさかのぼる。八ツ場ダムの総貯水容量が1億750万立方㍍であるのに対して、戸倉ダムは9200万立方㍍と遜色がない規模でありながら、総事業費は八ツ場ダム4600億円に対して、1230億円と約4分の1だ。私は手紙にあった次の記述にも驚いた。

「何よりもすばらしいのは、水没人家なし。土地の9割が東京電力所有地、群馬県片品村の住民が、こぞって完成を願っていました。もちろん反対住民はほとんどなかったというものです」

戸倉ダムの建設予定地の9割が東京電力の所有で、残りの民有地にも家屋や耕作地がないという好立地だった。

なぜ、このダムは建設が中止されたのか。片品村を目指して現場を見ることにした。

上越新幹線上毛高原駅から、車で約1時間。国道120号に入ると「日本ロマンチック街道」という表示がカーナビに浮き上がる。長野県小諸市

戸倉ダム問題とは

全国で初めて国・水資源機構が建設途中に中止したダム。東京、埼玉、千葉、群馬県渋川市が水利権を持っていた。1982年に旧建設省の水資源開発基本計画に盛り込まれ、92年に利水者や量が決まって建設が始まった。96年に予定地周辺で環境庁（当時）が絶滅危惧1B類に指定するクマタカの営巣が確認され、工事を休止。再開後間もなくの03年12月、水余りなどを理由に埼玉県と東京都が相次いで、続いて千葉県と渋川市も撤退を表明。国も「利水者の事業参加が見込めない」として、建設の中止を決定した。

総事業費1230億円、総貯水容量9200万立方メートル、湛水面積（たまっている水面の面積）200ヘクタール、高さ158メートル、幅530メートルの重量式コンクリートダム。

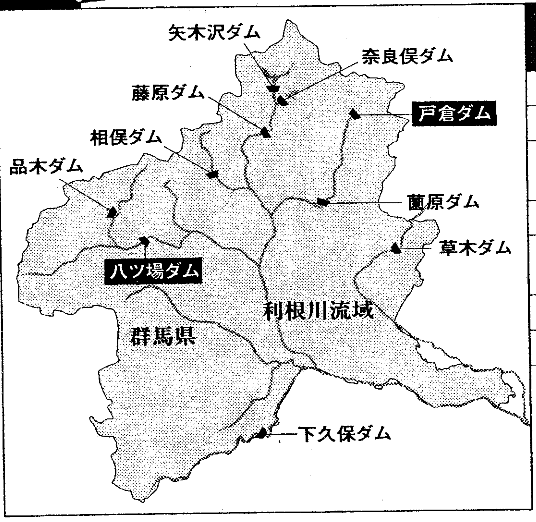
ほさか・のぶと　1955年、宮城県生まれ。16歳で内申書の内容を争う原告となり、定時制高校を中退。教育ジャーナリストとして活動。96年の総選挙で社民党から初当選。今年8月の総選挙で落選した。3期務めた在任中の質問回数は546回を数え「国会の質問王」の異名をとった

公共工事拝見！第3弾

八ツ場ダムの隠さ

消えた「格安

国会の質問王 保坂展人 前衆院議員 が現場を歩く



八ツ場ダム	八ツ場ダムと戸倉ダムの比較表	戸倉ダム
約4600億円	総事業費	約1230億円
1億750万立方㍍	総貯水容量	9200万立方㍍
約1300億円 (03年4月時)	投入された予算	289億円 (03年度終了時)
未着手	工事進捗率(本体)	未着手
81%(付け替え道路) 87%(付け替え鉄道)	工事進捗率(周辺)	未回答
340	水没世帯	0
2400	洪水調節量(立方㍍/秒)	670

から草津温泉を通り、沼田市から片品村へと向かっている。旅をこよなく愛した歌人、若山牧水が歩いた街道筋でもある。

戸倉ダム撤退の経緯を最もよく知る人物で前村会議員、萩原一志さん(53)を訪ねた。戸倉地区で民宿を経営しながら、ダム問題に奔走した中心人物だ。萩原さんはこう説明する。

「ダム事業が中止になると聞いたときは、まさに寝耳に水でした。私たち水源地の方は長い時間をかけて準備してきたのに、下流の受益者の勝手な事情で一方的に離婚させせられるような気持ちになりました」

すでに工事は始まっていた。1230億円の事業予算に対して、ダム中止問題が浮上した03年までに、289億円が投じられていた。建設が着手されていたダム事業で、国が建設中止を決めた初めてのケースだった。

「『水需要がない』という下流の事情でいきなり中止になって、放り出されたんじゃかなわないと思い、当時の村長や議長と手分けして、東京都や埼玉県、千葉県、国土交通省などを訪ねました」

そして、国のまちづくり交付金9億7600万円、利根川・荒川水源地域対策基金より10億2400万円の約20億円で、ダム建設中止の「代償」として「生活再建事業」が行われた。この整備事業が終わったのが、今年の3月末のことだ。

生活再建事業は土木事業ばかり

萩原さんの案内で、ダムサイト予定地に向かった。戸倉地区の集落から2㌔ほど国道401号を登ると、東京電力戸倉発電所の看板が見えてくる。道路から見下ろすと急峻な渓谷の幅がひときわ狭くなったところが、ダムサイト予定地だった。ダムサイトの高さは158㍍で、完成すれば日本で3番目の高さになる予定だった。

「ダムサイトに取り付けるエレベーターも外の景色が見えるガラス張りにしてもらい、ダム湖を周遊するコースで観光にしようと話し合っていたんです」(萩原さん)

群馬県が窓口となった交渉により、ダム工事中止以後も当初から予定されていた主な生活再建施設の建設は続行することになり、5年間で次々と施設がつくられた。

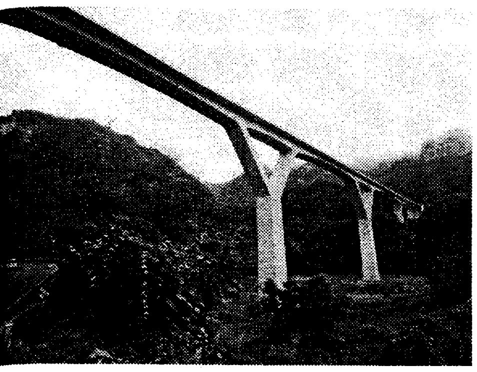
標高1095㍍の山の中に建設された野球場は広島球場と同じ広さを持ち、ヤンキースタジアムの形で造られた。テニスコートや散策路もある。

「これが完成して、野球部の強化練習に使われるようになりました。宿泊施設に夏場の部活動のための予約が増えています」(萩原さん)

「親水公園」「並木公園」「十二の森公園」「大駐車場」など、様々な土木系の施設や公園などが完成した。

唯一の雇用の場となった「尾瀬ぷらり館」では地元から2人が雇用された。温泉も併設されているが、展示物の

ダムサイト予定地に立つ萩原一志さん(右)。尾瀬ぷらり館(中)や野球場(左)のような土木事業の形でしか、片品村にはカネはおりてこなかった



八ツ場ダムは本当に必要なのか、依然として残る疑問

ほとんどは東京電力の「東京電力自然学校尾瀬・戸倉教室」が占めている。

集中的な土木工事で、地元に雇用効果はあったのか、萩原さんに聞いてみた。

「その点は思ったほどではなく、不満でした。とにかく短期間に、国の基準に合わせて事業申請しなければならないことに矛盾を感じました。本来は地元振興で資金を拠出してくれるなら現金でもらいたかった。そうであれば、基金にして利回りを福祉や子育て支援にも使えたんです」

狭い地域に、これでもかと散策路や公園、運動施設や橋、展示館や駐車場が完成したが、こうした土木事業のメニューにそった形で「要望」しないと金がおりてこないという窮屈な仕組みは、八ツ場ダムでは繰り返されてはならないのではないか。

生活再建事業も終わり、戸倉ダムは地元でも完全に過去のものとなった。もう、6年前の戸倉ダム建設中止問題の痕跡は、完全に消えたといっていい。

八ツ場ダムの事業費を2110億円から4600億円と倍以上に膨張させる案を国土交通省（当時石原伸晃大臣）が、流域の都県に提示したのは03年11月のこと。そして、戸倉ダム建設中止が決定されたのは、その直後の12月だ。

八ツ場、戸倉とふたつの大規模ダムのみならず、その他のダムのあり方も含めて、総合的な比較と再検討がされたのは間違いない。

しかも、すでに建設の始まっていた戸倉ダムの事業中止の引き金を引いたのは、埼玉県の上田清司知事だった。就任直後の03年9月から、撤退表明の機会をうかがっていた。埼玉県の人口増予測を大幅に下方修正し、「すでに水需要がない」と見ていたからだ。上田知事は戸倉ダムについて、「勇気ある撤退」を決断したという。

戸倉より八ツ場取水量多し??

衆院議員時代、大型公共事業の見直しを国会で訴え続けていた上田知事は、00年の衆院大蔵委員会で、宮澤喜一大蔵大臣に対して舌鋒鋭く切り込んでいた。当時、建設省がダム事業の再評価をして17を中止、16を休止するとした。その理由が「水需要がない」「地質がよくない」ということについて、噛みついていたのだ。

「水需要がなくなったから、地質が悪いから、だから中止にしたという。だったら最初からていねいに調査をして必要かどうかを確認すればいい。そこそこで調査をやめて、やり始めてから地質が悪い、水需要がないといって中止するのは、お金の無駄遣いではないか」（衆議院会議録から）

八ツ場ダムこそ、「地質」「水需要」の点でブレーキをかけなければならないダムだと私は考えるが、上田知事は逆に推進の旗を高々と掲げている。

一方、戸倉ダムは「水需要はない」と受益者の埼玉県から事業費の拠出を中断するという判断があり、東京都をはじめとした他の自治体もこれに従った。八ツ場ダムでは、上田知事がかつて属していた民主党の前原国土交通大臣の「中止決定」に対して、「渇水期の対策が必要」と強く抵抗することに、首を傾げるのは私だけではないはずだ。

戸倉ダム中止決定の翌年の04年3月8日、埼玉県議会では逢澤義朗議員（自民）が、上田知事を相手に鋭い指摘をしている。

「本当に長い目で見たら、どうしてもつくるなら、戸倉でもやむをえない。（八ツ場ダムだと）毒水をとにかく飲まなきゃならぬ。毎年、ずっと200トンの石灰を使う。その石灰も、溶けたやつをどこかへ捨てなきゃならぬ」

八ツ場ダムに注ぎ込まれることになる強酸性の水の問題を問われた上田知事だが、

「なぜ、戸倉ダムが撤退で八ツ場ダムなのかと言うと、一口で言えば水量の差です。基本的には戸倉ダムの5倍の水量を八ツ場ダムでまかなうことが出来る」

と答えた。水質に問題があっても、水量の確保が優先するとでも考えたのだろうか。

週刊朝日編集部が、なぜ予算が膨張する八ツ場ダムを選んで、相対的には費用もかからず水没家屋もない戸倉ダムを中止したのかなどを埼玉県、千葉県などに、質問した。

回答書によると、受益者である下流域の自治体は、総貯水容量がほぼ同じでも戸倉ダムより八ツ場ダムの方が各自治体が取水できる量が多いからだと主張している。

埼玉県によると、99年度時点の計画で埼玉県が予定していた水源の全供給量に占める八ツ場の供給量が20・4％であるのに対し、戸倉は4・6％。千葉県は、2015年度の水道水の予想需要に占める八ツ場の供給量が約7・8％であるのに対し、戸倉は約0・3％であるとし、

「利水面において戸倉ダムの参画水量を八ツ場ダムに振り

替えることにより、水道水の安定供給が可能となったため、利水からの撤退を表明したもの」（埼玉県）

「安定給水を図るため、（中略）八ツ場ダム等は必要な施設」（千葉県）

と主張している。

また建設コストについても、八ツ場と戸倉の供給量の違いを前提に千葉県は、

「1立方㍍当たりの開発単価で比較すると八ツ場ダムの方が安価となるなど、負担額はダムごとに治水の受益の程度や利水参画事業体の参画水量などにより変わるものであり、総事業費のみで一概に比較することは適切ではない」

と答えた。埼玉県も同様に、

「必要な施設に対して適正な支出を行っているものであり、八ツ場ダムを推進することが県民の負担を増やしたことになるとは考えていない」

「（戸倉ダムは）当時建設中のダムの中でもっとも進捗率が低かった」

としている。

水源守る私たちの努力を下流都県にも知ってほしい

千明（ちぎら）金造　片品村村長

私の前任者である前の村長は戸倉ダムが中止になったために命を落としたようなものです。

戸倉ダムは絶滅危惧（きぐ）種のクマタカのための環境アセスメントで時間がかかりました。それでも最終的には問題をクリアして工事が本格的に始まると思っていた。ところが、前の村長が当選して1カ月後の2003年12月に戸倉ダムが中止になりました。小さな村ですから、（期待していたダム事業が）中止となると「村長の責任だ」となる。相当まいったんでしょうね。05年9月に亡くなった。田舎というのは都会の目線とは違うんです。

下流都県の人たちには、水源を守っている私たちの努力をもっと知っていただきたい。私たちは下水道にお金をかけて、水をきれいにして川に流している。そのいい水が飲める受益者は、下流都県の人たちなんです。下水道の維持管理費でさえ、下流都県が出すべきだと私は思っています。

「治水」の面はどうなった戸倉

水没家屋のないダム計画をあえて中止することについては、

「中止した場合でも地元住民への影響が少ない」（埼玉県）

としている。「水没家屋がない」ことが、ダム建設ではなく、逆に中止を判断するにあたって有利な材料となったということらしい。

東京都は期限までに回答がなかった。

ダム建設に反対する各地の市民団体でつくる「水源開発問題全国連絡会」共同代表の嶋津暉之氏は、こうした自治体の見解に疑問を投げかける。

「戸倉ダムと八ツ場ダムを全利水容量と都市用水開発水量について比較すると、前者が6400万立方㍍、3・00立方㍍／秒、後者が9千万立方㍍、22・2立方㍍／秒であり、利水容量1千万立方㍍あたりの開発水量は戸倉ダムが0・47立方㍍／秒、八ツ場ダムが2・47立方㍍／秒で、八ツ場ダムは戸倉ダムの5倍以上にもなっている。でも、そもそも開発水量そのものが戸倉ダムは過小評価、八ツ場ダムは過大評価されている可能性が高く、額面どおりの費用対効果を比較しても意味がない」

と指摘する。ほぼ同規模のダムからの開発水量が5倍に膨らむ根拠をさらに問いただす必要がある。

ただし、戸倉ダムも「利水」「治水」の多目的ダムであった。「治水」の面はどうなったのだろうか。埼玉県は「国土交通省が決定した中止なので、その理由はそちらで聞いてください」と明言を避けている。

八ツ場ダムの再検証を約束した前原国土交通大臣だが、もはや野党・自民党よりも前に出て「建設推進」のスクラムを組む1都5県の知事たちが「過去」に封印しようとしている「不都合な真実」を今こそ浮き彫りにしてほしい。

週刊朝日10月16日号で指摘したように、石灰で中和した八ツ場ダムの水と膨張を続ける工事費を丸のみして認めながら、平成の名水の水源地から送られようとした戸倉ダムを中止した全経緯こそ、検証されなければならない。

生活再建も「箱物」や道路土木事業だけでなく、地域の自主財源として活用できる形にするべきだと改めて痛感する。

名将たちの壮大な決断ドラマ100！
週刊 朝日カルチャーシリーズ【全50冊】
名将の決断
34号 北条時宗（元寇）
大友宗麟（耳川の戦い）
好評発売中 毎週木曜日発売
※一部地域で発売日が異なります。
定価580円（税込）
朝日新聞出版